September 号外 2015

過去と現在を行き来しながら、未来を考える壁新聞

上町台地 今昔タイムズ

上町台地 今昔フォーラム vol.4 Document

UEMACHIDAICHI KONJAKU TIMES

企画・編集　U-CoRoプロジェクト・ワーキング／発行　大阪ガス エネルギー・文化研究所（CEL）
問合せ先　tel.06-6205-3518（担当：CEL弘本）※U-CoRo＝ゆーころ（上町台地コミュニケーション・ルーム）
ホームページ　http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html

文画人・堤楢次郎が描いた“大大阪”のフロンティアとは

～絵画を手掛かりに未来への記憶を呼び覚ます

U-CoRo Step 2
壁新聞プロジェクト
関連イベント

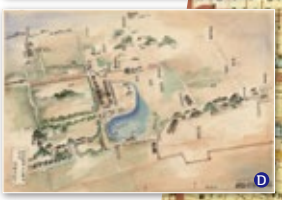
▲壁新聞「上町台地今昔タイムズ」第4号（第1面）

大正から昭和へと、大阪のまちが一気に近代化し拡大していった時代。自分が生まれ育った地、遥かに広がる田園が、住宅と工場の建ち並ぶまちへと刻々と変化していく様を、日本画と文で誠実に記録した堤楢次郎さん。

今回のフォーラムでは、こうした作品とその足跡をたどり、背景にある風土を捉え直すことからはじめ、「“大大阪”のフロンティア」と「未来への記憶」をキーワードとして、堤楢次郎さんの作品に宿る私たちへのメッセージを読み解いていくことを試みました。

※「上町台地・今昔タイムズ」のバックナンバーやプロジェクトの歩みは、ホームページ「大阪ガスCEL」「U-CoRo」で検索してご覧いただけます。

■日時：2015 年9月12日（土）14：00 ～
■場所：大阪ガス実験集合住宅　NEXT21
　　2階ホール（大阪市天王寺区清水谷町6-16）
■主催：大阪ガス エネルギー・文化研究所（CEL）
　企画：U-CoRoプロジェクト・ワーキング
■プログラム：
　レクチャー1　講師 足代健二郎氏（猪飼野探訪会）
　レクチャー2　講師 小野賢一氏（猪飼野探訪会）
　クロス・トーク コメンテーター
　　明尾圭造氏（大阪商業大学総合経営学部准教授）
　　加藤政洋氏（立命館大学文学部准教授）
　　足代健二郎氏・小野賢一氏（前掲）



「上町台地 今昔タイムズ」第4号に掲載している堤楢次郎さんの作品

背景の地図は「イロハ引早わかり大大阪市街図」（大正15〈1926〉年）

レクチャー1 〈ダイジェスト〉
大阪・上町台地と鶴橋・猪飼野の風土 足代健二郎 氏（猪飼野探訪会）

足代 健二郎 氏

鶴橋・猪飼野の原風景とは

上町台地の東に広がる鶴橋・猪飼野という地域は、江戸時代からずっと大阪近郊の農村地帯でした。約百年前から急に開けだしたのですが、その前後の2つの時代の様相は大いに異なるものです。

猪飼野は、猪甘津（いかいのつ）というのが原点。「日本書紀」の仁徳天皇十四年の条に、そこに橋を渡したとある。場所は旧平野川にあった鶴の橋の辺りと推定されます。

堤楢次郎さんもこの付近の絵を残していますが、それ以前の明治20（1887）年頃にも、まさにこの地を描いた絵があります。それが「浪華名所図」の一枚「猪飼野」。説明書きには「今の鶴橋西四丁目辺」と書いてあります。「浪華名所図」は全体で50枚ほどあり、この付近では、御勝山や舎利寺も描かれています。この「猪飼野」で描かれているのは鶴の橋。これは鶴橋という今の地名の元にもなっています。昔からここが猪飼野のもっとも特徴的な風景だったと言えるでしょう。

この絵の中に描かれているのは百年以上前の風景です。真ん中の川が旧の平野川。現在、流れているのは、後に付け替えられた新平野川で、旧の平野川は埋め立てられ、姿を消しています。

絵の説明には、「明治二十年頃の猪飼野 遠くに見えるは木村権右衛門宅 前の川は平野川にして 橋は鶴の橋也」とあります。真ん中に石の橋が架かっている。右には赤い鳥居の神社があるが、実際はこういう場所には神社はない。面白くするためのデフォルメでしょうか。作者は、「松華」の署名がありますが、どういう人物かは不詳です。左に描かれた木村邸は豪壮な屋敷。現在、跡地は駐車場になっていますが、樹齢400年の椎の木の神木などが今も残されています。

江戸時代の戯作者・大田南畝（なんぽ）（蜀山人）もこの地を訪れ、日記「蘆（やね）の若葉」（1801年）の中で「橋の向かいに屋高く作れる家見ゆ 何がしの守（かみ）の御苑（みその）にやと問うに 権右衛門といえる農夫の家なるよし 素封（そほう）の類（たぐい）なるべし」と書き残しています。橋の辺りから眺めると、どういうものかというような屋敷が見える。木村権右衛門という農夫の屋敷だと。こういった古い情景。

耕地整理により様変わりする風景

大正時代の中頃、旧平野川に代わり、鶴の橋のもっと南の大池橋のところから分岐させて北へ直線的に向かうよう、新平野川の開削・付け替え工事が行われています（P.1地図参照）。

その工事と同じ頃、今から95年ほど前の大正8（1919）年から、この付近では「耕地整理」というものが行われました。実際、この前後で、猪飼野の風景は一変したと言えます。純農村だったところに、急激にまちが開けたわけです。本来、耕地整理は農地改良が目的。しかし、大阪市の急激な発展に伴い、東郊にあたるこの地域では、そのまま住宅地の供給が行われたわけです。建売、借家が次々と建てられ、昭和2（1927）年には、全域に住宅が建ちふさがったと言われています。

もう一つ、猪飼野は日本最大の在日コリアン集住地で、現在はコリアタウンが有名ですが、その成立もこの耕地整理と大きな関わりがあります。大正11(1922)年に、済州島と大阪の間に直行の船便が就航し、それを使って済州島の人たちが大阪に働き口を求めて、どんどんやってきました。ちょうどそのころに、この地域は耕地整理で急速に開けてきており、また仕事もあったわけです。ただ、この平野川の付替・開削工事のために朝鮮の人を連れてきて掘らせたというのは、あくまでも俗説。そこには、もちろん朝鮮人の土工もいたし、日本人の土工もいました。この地には、当時、大阪の近郊や他府県からも人々が大挙してやってきたわけです。

現在のコリアタウンが有名になったのは、ここ20年くらいのことで、その中心部は、元は朝鮮市場だったところです。朝鮮の人たちが食料や生活の必需品を買うような店が並んでいたのを、神戸の南京町などに倣って、美麗な門を建て、カラーレンガ舗装などを行った。その結果、現在は平日でも大勢のお客さんがやってくる観光地のような場所になっています。

浪華名所図「猪飼野」（明治 20〈1887〉年頃の風景、大阪市立中央図書館蔵）

人材の豊かさと猪飼野学の可能性

旧平野川沿いには、亀の橋、柳橋、榎橋の親柱など、橋の痕跡が現在でも点々と残されています。それらの橋は、江戸時代からのものもあれば、大正時代に架けられたものもある。やはり川と橋の姿が猪飼野の原風景だと言ってよいでしょう。

また、この地域には、松下幸之助さんの起業の地や、司馬遼太郎さんゆかりの新世界新聞社跡もあります。司馬さんは鶴橋に生まれ、戦後復員して初めてこの新聞社に勤めました。松下幸之助さんも借家住まいをしていたところを改造して、そこでソケットを作りだした。政治評論家の竹村健一さんや作家の梁石日（ヤンソギル）さんなど、ユニークな人材も出している。猪飼野にゆかりある著名人の番付を作ると、おどろくほど豊かであることがわかる。

それはなぜか。私が考えるに、ここは大阪のまちから少し外れたところではある、しかし、上町台地の麓で、逆に言うとすぐ近くにある、それが大きい。そのため、大阪市域の拡大にともなって急に開け、激しく変貌していった。堤さんがこの地を中心に記録画を描いたのも、こうした猪飼野の風土ときっと大きく関係していることでしょう。これらを一つずつ検証していくと、おおげさに言えば、「猪飼野学」にもつながるのではないかと、私は考えています。

レクチャー2 〈ダイジェスト〉
堤楢次郎の作品と足跡をたどる 小野 賢一 氏（猪飼野探訪会）

文中のⒶ～Ⓚは、「上町台地今昔タイムズ」第4号掲載時の絵の記号を示しています。（P.1 の作品・地図などを参照）

小野 賢一 氏

50年にわたり描かれた記録画

堤楢次郎さんは明治29（1896）年に生まれ、昭和58（1983)年に87歳で亡くなりました。大正から昭和にかけて、カメラの普及していなかった時代に、大阪のまちとその郊外の風景を描き残しています。それも、庶民の立場でご自分の身近なところを描くことを試みた方でした。

楢次郎さんは、旧の鶴橋町、味原池の近くに生まれ、終生、鶴橋の町から出ることはなかった。19歳の時から何回か大阪画壇を中心とした美術展覧会に出品し何度か入選。そこで、山口艸平（そうへい）や久保井翠桐（すいとう）に出会い、その指導を受けました。高島屋美術部に勤務しながら絵を描き、職場の後輩の向井潤吉さんとも親しく交わった。大正9（1920）年に書道家のアサコさんと結婚。やがて28歳のときに方向を転換します。師匠の後押しで最後の展覧会を開き、その後、鶴橋町木野の旧猫間川沿いで印刷業を始め、それによって生計を立てる道を選ぶ。こうして仕事を続けながら、今も残る記録画を生涯にわたって描き継いでいったわけです。

戦後は、牧村史陽（しよう）の佳陽会に参加し、郷土史研究にも取り組んだ。それから、お孫さんの堤條治さん、今日会場に来られていますが、当時は幼児だった彼の手を引いて、しばしばスケッチに出かけたそうです。平野川周辺やさらには大川・淀川沿いを歩いた。当時は大阪が高度成長の時代。大阪がいっそう大きく変わる前の時代の絵を残しています。また、この頃、かつて自分が描いたスケッチ画をもとにしてリメイク版を描いています。こうして引退したのち50年近く、人に知られることなく、記録画を残してきたわけです。

楢次郎さんが残した百年前の大阪市内風景

堤楢次郎さんは、大阪近郊の風景を残す一方で、大正時代の大阪市内の様子も作品として描いています。

約百年前の大阪市内の絵を紹介します。「淀屋橋南詰」Ⓑ（大正5〈1916〉年）は、東南側から淀屋橋を見て描いたものです。御堂筋に拡張される前の道で、当時は傍らに森下仁丹のイルミネーションがありました。橋の向こうには日銀の建物。川から荷を揚げ降ろしする雁木の痕跡も描かれています。

「月」Ⓐ（大正7〈1918〉年）は、大川町界隈の瓦屋根の商家のまち並みを描いた作品で、後方には洋風のドームの建物。絵には関西日報の屋上から描いたとありますが、そこは今の日生淀屋橋ビルがある場所。いろいろ調べるうちに、ドームは住友総本家の建物だと判明しました。現在、この辺りには住友ビルが建っています。

同様に大阪市内を描いた絵に、「東横堀 丸町の浜にて」Ⓒ（大正4〈1915〉年）があります。大川から分かれ、真っ直ぐ南下する東横堀川が、本町のあたりで東にかぎ状に曲がるのが「本町の曲がり」。近くにお住まいだった花屋さんの話では、戦前には、この付近から南にかけ、いくつかの捺染（なっせん）工場があったそうです。染め物をし、川で洗う。また、干し場では染布が風になびいている。この様子は、大正から昭和にかけての水都の初夏の風物詩でした。後に出た雑誌「上方」にも、似た構図の挿絵があり、昭和17（1942）年には当時の東高等女学校の図画の先生が、本町橋から南を見た絵を仕上げています。それは畳1枚分の大作で、現在も大阪市立東高校の校長室に飾られていますが、これも花屋さんから教えていただいた話。いずれにせよ、こういう絵は、楢次郎さんが最初に描いたように思われます。

こうした捺染工場は、昭和10年代くらいまでは、旧淀川や東横堀川、また平野川にも、かなりあったそうです。私は東成区生まれですが、私が物心ついた60年

ほど前には、今の新平野川は汚く、水面からはメタンガスが出ていました。しかし、それより20年ほどさかのぼる時期には、平野川はもっと清らかだったわけです。

大正時代の鶴橋を見てください、という楢次郎さんのメッセージ

旧鶴橋町は、大正時代に大阪市に編入され、それと同時に農村地帯から工場や住宅地域へと急激に変貌します。

堤楢次郎さんが書き残している言葉に、自分の作品では、「絵を見るのではなく、大正時代の鶴橋を見てください」というものがあります。つまり、記録画として、自分の絵を見ていただきたいということ。

この地域を描いた俯瞰の絵もあります。「明治晩年の小橋及付近」Ⓓは、大正時代に埋め立てられた味原池の周辺図。桃畑などの畑地と草地が広がっています。下を走るのは城東線の蒸気機関車。

「明治41年 その頃の桃山駅（桃谷駅）付近の図」Ⓚ（1908年）にも、蒸気機関車が描かれています。ほとんど田んぼと森と原っぱ。そこに今はない猫間川と旧平野川が流れている。旧平野川には「つるのはし」があり、下流には御幸森神社がある。また、当時の桃山駅（後に桃谷駅と改名）の南には現在の桃谷商店街になる道があります。近くには、よしの墓。駅の北西に、柿山、豊川稲荷が描かれ、台地の坂を登っていくと女子師範学校も。これは、実際に歩いて見知っている地域を俯瞰図として描いたものでしょう。

大正元（1912）年、この辺りの地域は鶴橋町になります。「鶴橋小学校八〇年のあゆみ」（1956年）によると、当時の人口は約9000人です。ところが、その10年前は2000人ちょっとでした。1戸当たりの家族人数は、明治35（1902）年は6.4人。多くは夫婦に子どもが2〜3人と祖父母という具合か。その家族構成もたちまち大きく変わっていき、10年後には1戸あたり人数は約3.2人と半分になっています。この間、たくさんの住宅が建てられました。人口急増はその後も続き、大正6（1917）年には約2万3700人。それまでの15年間で、実に人口は10倍以上になっており、その激変ぶりがうかがわれます。また、職業別の戸数調べでは、明治42（1909）年に農家が約220戸だったのが、10年経つと120戸にまで減っている。一方、労働者の戸数は約20倍になっています。

堤楢次郎さんが描き残したのは、大正7（1918）年よりも前、この地域が大きく変わり始める時期を中心にした風景でした。

例えば、「平野川 東成郡鶴橋町の北端（三枚橋）」Ⓕ（大正4〈1915〉年）の絵に描かれたのは、平野川の上に三枚の板を乗せてつくった橋と田んぼの風景。この絵の説明書きを見ると、後方にあるまち並みが玉造の二軒茶屋。電信柱もいっぱいあり、電気も通っていたことがわかります。

もう一つ、「平野川 鶴之橋一丁北」Ⓘ（大正5〈1916〉年）は、鶴の橋から少しだけ下流の風景。川に降りる細い道がありますが、当時その右側にあったのが大日本紡績副社長の邸宅。左側には、道沿いの家を挟んで造り酒屋があり、旧の平野川から舟運用の水路が引き込んであったそうです。堤楢次郎さんは、この平野川で女の人が洗濯をしている姿を描いています。ただ、ここで不思議なのは、傍らにガス灯が立っていること。堤楢次郎さんは反対側の岸辺からこの絵を描いていますが、実は、ちょうどその背中方向に鶴橋小学校や鶴橋町役場があり、役場の入り口にはガス灯があったと言います。この辺りは、農村地帯だったと同時に近代的なものが続々と入ってきていた場所。それをデフォルメして描き加えたのではないか。

近代的なものと言えば、「城東線 桃谷駅」Ⓙ（大正8〈1919〉年）の絵もあります。跨線橋とホームがあり、北に向かって機関車が止まっています。当時は、乗り降りする人も非常に少なかったそうです。

「猫間川」Ⓗ（昭和7〈1932〉年）の絵。場所は鶴橋町木野。猫間川の向こうには堤さんの印刷屋があります。前の道で犬を引っ張る人がいます。猫間川はなくなりましたが、この道は今も残っています。

木野付近の田んぼの風景は、スケッチなどに残されています。今回の「上町台地今昔タイムズ」第4号で思い出を語っている沢田正夫さんは、現在102歳の方ですが、お父さんが鉄道線と猫間川の間で小作をしており、子どもの頃には絵のような道を通ってお昼ごはんを届けたそうです。

戦後には、大川・淀川あたりの風景も描いた堤楢次郎さん。淀川の赤川鉄橋や中之島の田蓑橋、西九条や天保山なども題材にしています。多くの絵には、工場があり、煙突からは煙が出ている。こうした高度経済成長期に入る前の大阪の様相について、堤楢次郎さんはご自分なりに描き残そうとしていました（P.7の作品参照）。

堤楢次郎さんが描いたスケッチほか

22歳の頃の堤楢次郎（大正7〈1918〉年頃）

大川町界隈（大正4〈1915〉年頃）

東横堀（大正4〈1915〉年頃）

城東線沿い（旧木野村）（大正4〈1915〉年）

クロス・トーク〈ダイジェスト〉
画業と作品に宿るメッセージを読み解く

明尾 圭造 氏（大阪商業大学総合経営学部准教授）
加藤 政洋 氏（立命館大学文学部准教授）
足代健二郎 氏　小野賢一 氏　司会 弘本由香里（CEL）

明尾先生・加藤先生のコメントをうかがい、会場からの声も交えながら、クロス・トークを展開しました。

■堤楢次郎とは、どんな画家だったのか

明尾 圭造 氏

堤楢次郎さんの絵との出会い

明尾　2年ほど前のことです。私が勤める大阪商学大学の催しで、小野さんが堤楢次郎さんの作品を展示していました。それを拝見したときに、私は、なんと気持ちのいい作品群だろうと感じました。しかも郷土の風景を描き、大正の気分までを如実に表している。

その後、大正時代の「現代書画家名鑑」を繰って調べてみると、堤楢次郎さんのことが書かれていました。「梨雪、堤楢次郎、大阪府東成郡鶴橋町猪飼野1507」、また、久保井翠桐（すいとう）、山口艸平（そうへい）の弟子であると。

大阪画壇の系譜のなかで

地元の画家あるいは地域の文化に対し、実は大阪というところには、割と冷たい部分があります。例えば、公的文化施設で地元画家の展覧会をしようとしても、その展覧会をして「何人、人が来るか」と、費用対効果で判断され、結局実現しない。

北野恒富（つねとみ）は、大阪の画家としては著名な人ですが、この人は大正時代、ちょうど天王寺の美術館ができた時に、こんな提案をしています。まず、誰もが知っている大きな展覧会はしないといけない。ただもう一つ、大阪市内で頑張っている若手の作家も含めてそれを検証する展覧会もやって欲しいと。にもかかわらず、当時から現在に至るまで、その北野恒富の展覧会は、そういうところでされたことがないし、同様に菅楯彦（すがたてひこ）さんの展覧会も公立館ではされたことはない。

むろん、当時から大阪には、東京、京都に匹敵するような画家の集団がありました。明治17（1884）年に浪華画学校ができています（数年で閉校）。明治36（1903）年に第五回内国勧業博覧会を天王寺でした時には総数で数百点の作品を陳列しました。翌年には「浪華青年画会」が結成され、明治39（1906）年に「大阪絵画春秋会」もつくられました。大正元（1912）年結成の「大正美術会」には、北野恒富、野田九浦（きゅうほ）、菅楯彦、上島鳳山、水田竹圃（ちくほ）の名が上がり、堤楢次郎さんの師匠の久保井翠桐さんも加わっています。しかし、こうした動きが、皆が一致団結して大阪の美術界を盛り立てていく方向にはなかなか向かわない。もしもこの段階で、もう少し京都や東京のように動いていたら、大阪の美術界も多少違った状況になったかもしれません。きっと、堤さんたちお弟子さんたちの出番ももっとあったでしょう。さらに決定的要因は、京都と東京にあった公立、官立の美術学校が大阪になかったこと。これでは師匠と弟子の連続性が育たない。

それでも大阪には美術市場はあり、そこでは百貨店の存在が大きかった。なかでも高島屋の美術部はひとつのステータスでした。堤楢次郎さんは、その高島屋美術部に所属していたという。そういう流れのなかで、師匠について自分の画業を進めていた。しかし、展覧会の出品作を制作するとなると、日本画は画料が非常にかかる。また、ある団体に属すと、師匠の推薦・特薦をもらうなど、上下のつながりがないとなかなか通らないこともあったでしょう。一筋縄ではいかない。

実際、北野恒富の文章に、研究所を持ち、画家を養成するのは非常に責任を有することだと書いてある。若い人は、自分は絵がうまいので、これで食えると思ってしまう。たとえ認められなくても、自分には絵があるということで、方角違いにずれてい

平野川 東成郡鶴橋町の北端（三枚橋）（大正4〈1915〉年）

平野川 鶴之橋一丁北（大正5〈1916〉年）

猫間川筋（昭和7〈1932〉年、堤楢次郎の住居兼印刷所）

く者が多く、世の中に対して申し訳ないと。できれば、自分の画業をよくよく考えて、公務員になる、あるいは自分で店をもつというふうに軌道修正してくれたらいいのだが、なかなかそうはいかんのがこの世界だと。

自らの道を選んだ堤楢次郎さん

堤楢次郎さんは、どの時点かで、自分の生きていく道を大きく変えられた。印刷業で生計を立てつつ、自分の画業は続けていった。

ちょうどその時期、大正時代になると、日本中で地域が激変していきます。それに対して危機の念を抱き、自分たちの郷土はどういうところかを研究していく機運が生まれてきます。大阪では、堤さんも関係していた郷土研究「上方」が生まれた。例えば大軌鉄道が通る、省線国鉄の関係で地域がどんどん変化する。平野川も付け替えられる。こうした変化に対して、郷土に対する愛情が呼び起こされていきます。

大阪郊外の猪飼野・鶴橋でも、ちょっと前までは繊維工場があり、布を川で洗っている、日常生活でお米も研いだりしていたところが、もうメタンガスが沸いている。でも、清らかだった頃の川を知っているならば、やはりそこに危機意識をもつ人も出てきます。

これは江戸時代から言えることで、「摂津名所図会」「河内名所図会」「和泉名所図会」といったものも、その時点で、画家の目で見て、これは必要だと思うところが描かれ残されてきました。そのおかげで我々は当時のことをうかがい知ることができる。こういった系譜の中で堤楢次郎さんは自分が住み暮らしている地域のことを作品にして残していったわけです。

では、こうした絵と写真とは、いったいどこが違うのか。それは、写真は全体をシャープに写すが、絵の場合は描く画家にとって、ここが重要だと感じるところがデフォルメされているということ。そこを中心にして描き切っていく画家の視線を我々はあとで追うことができる。そういう意味で、堤さんが「ここは」と思ったところを一緒に確認していく作業はたいへんにおもしろい。小野さんは一歩足を踏み入れて、もう抜けられなくなっている（笑）。

昨日、京都である古本屋さんへ行きました。デッサン帳17、8冊を含む一箱ほどの資料が出ていたのですが、それは広島の画家が描いた明治末から昭和初めにかけてのものでした。貴重な資料がそうやって流れ出てしまう。楢次郎さんの場合は、堤條治さんが守ってくださり、それに小野さんがたどりついた。このありがたい連鎖がないと地域に資料は残らない。こういうことも含めて、今回は、我々が地域でやらないといけないことは何かを考える実に良い機会になっていると思います。

■拡大する大阪市街域と水辺の風景の変貌

加藤 政洋 氏

『アサヒ写真ブック37 大阪』（朝日新聞社、1956 年）

加藤　楢次郎さんの絵について話す前に、まず大阪にあって、水辺なるものが、いかに捉らえられてきたのかを少し広い視野から見ていきたいと思います。

都市の無意識を映し出す水辺の風景

まず古い写真集から。昭和31（1956）年出版の『アサヒ写真ブック』は、表紙にも中之島周辺を載せることによって、大阪が水の都であることを明示しています。次に昭和30年代の写真を中心にしたのが岩波書店の『大阪は水の都』（1994年）。また、大阪城天守閣の企画展パンフレット『おおさか水辺の風景：古写真は語る』（2006年）などもあります。

戦前の絵はがきでも、水辺の風景は数多く撮られていました。大阪市庁舎や日本銀行の写真でも、たいていは川の流れを手前に入れて撮っています。難波橋や天神橋、心斎橋を含め「橋」をテーマにした絵はがきも戦前から数多く流通していました。さらに毛馬閘門。楢次郎さんも描いていますが、これも近代都市大阪の形成に重要な意味を持った風景です。

川をたどっていけば必ず海に行き着く。築港方面に関してもたくさんの写真が撮られていました。

安治川の河口部は煙がもくもく上がる工業地帯。東洋のマンチェスターと言われた時代もありました。船運と連動した工場が大阪湾岸に位置し、とりわけ大正期大阪を代表する景観となっていました。多くの写真はあえて川を挟んで撮られていて、煙も映し出す。当時の大阪の経済活況を象徴する絵でもありました。

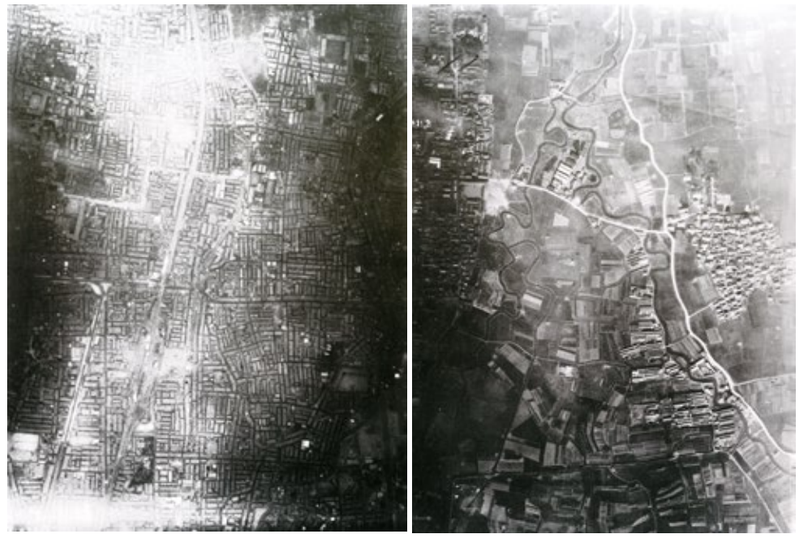
『大阪は水の都』（岩波書店、1994 年）

『おおさか水辺の風景：古写真は語る』（大阪城天守閣、2006 年）

昭和6（1931）年にできた中央市場の空からの写真を見ると、鉄道の引き込み線が入り込んでいて、手前の川には船が接岸しています。つまり水と陸の結節点。これも昭和大阪の水の都としてのモダン性を象徴する景観です。

戦後になると、市中の堀割はあらかた埋められ、その上には高速道路が建設されていきます。それを予感してか、堀割を空から見た写真も増えます。これらは、高度成長がまさに始まらんとしている時代の都市の鳥瞰的な図。

意識しているにせよ無意識的であるにせよ、写真は都市の無意識を映し出すと、ドイツの思想家ヴァルター・ベンヤミンが言っています。こう見てくると、水のあり方というのが、大阪の市民のメンタリティ、心性と、やはり切っても切れない関係にあったことがわかります。



大正 13（1924）年撮影の航空写真、左は玉造駅周辺、右は舎利寺村・田島村付近　（大阪城天守閣蔵）

描かれたのは広がりの一番端の部分

楢次郎さんは、工場の進出や市街地化の波に洗われる前の風景を描いています。ただ、絵のあり方で見ていくと、それはもっと鋭く、エッジのさらに一番端っこの部分が切り取られているように思えます。

雨後の竹の子の如くというのは、この当時の市街地化のスピードを物語る言い回しでした。にょきにょきと家は建つ。鶴橋の場合は、耕地整理事業、いわゆる都市計画法が施行される前の枠組みの中で市街地整備がなされ、そこが住宅の基盤になっていく。場所によっては耕地整理もなされないまま、田んぼの畦道がそのまま道路になり、田畑を土盛りしたくらいで長屋が建っていく。それが大正期の大阪近郊のあり方でした。楢次郎さんの絵は、そうした都市化の波に洗われる、まさにエッジみたいな所を描き出している。

大正13（1924）年の玉造駅付近の航空写真を見ると、東に向けて、まさに長屋が押し寄せている様子を見てとることができます。これが大正から昭和初期にかけての大阪近郊のひとつの姿。同じ時期のもう一枚を見ても、この辺では土地区画整理事業がまだなされていない状況ですが、すでに長屋状のものあるいは工場が田んぼの区画に散見されます。まさに一番端の部分。

もう一つ、楢次郎さんがすばらしいのは、描いた場所をきちんと特定してあることで、どの場所をどの方向から見たかが書き添えてある。記録の意味を込めた絵。なおかつ、その社会的、歴史的背景が、小野さんたちの研究により、ちゃんと位置づけられている。さらに「上町台地 今昔タイムズ」第4号では、古老たちへの取材により、その当時の記録、記憶が盛り込まれている。大阪の都市の広がりをこうした絵の中から読み取っていくような試みは、いろんな可能性を持つことを今、強く感じています。

堤楢次郎さんが戦後に描いた、大阪の水辺の風景

淀川風景 西九條
（いずれも 1950 年代制作）

淀川風景 中央市場荷揚場

淀川風景 田蓑橋

毛馬閘門（昭和26〈1951〉年）

天保山桟橋 るり丸出帆（昭和24〈1949〉年）

未来に向け描かれた絵（会場の声とともに）

堤條治　楢次郎の孫の條治です。僕はよちよち歩きの頃から、祖父と写生によく出かけました。乳母車に乗せられて行くのですが、畑とか川、田んぼに藁が束ねてあるところとか、気に入った風景があれば、楢次郎は乳母車を止めた。僕は下に降りて、そのへんでちょこちょこしている。その間にイーゼルを立て、絵を描いていた姿を今でもよく覚えています。

もしも今、楢次郎がここに生きていたら、どれだけ喜び、どれだけ驚いたことかと思います。絵を描いていた若き日に願っていたこと（この絵が後世の人々に見てもらえたらうれしい）が、今日まったく完全な形で再現されているからです。

実は、小野先生に8年前、初めてお会いしたとき、「また、へんなおっさんが来た」と（笑）。それまでも、何人か来られたが、「へぇ～」で終わり。今100年経っているから、ちょっと珍しいとか貴重とか言われるけど、30年目とか40年目だと多分ごみ扱い。楢次郎は危機を感じたのか、「條治、おまえにこれやるから、ちゃんと残しておいてや」と言った。僕自身は、その本当の値打ちはわからないけれども、おじいちゃんが一生懸命描いたものやし、約束だけは守ろうと。結果、今まで紙一重のところで保存されてきました。

小野　堤楢次郎さんは、60歳を超えてから、はがき大の絵を100枚ほど描いています。私は勝手に「大阪百選」と呼んでいますが、それらの場所を地図に落としてみたところ、上町台地を中心とした東側の、それも水辺が非常に多い。水辺をたどりながら大阪を捉え直そうとしていたかのようにも思えます。

足代　私は、堤楢次郎さんと生前にお会いしたことがあります。また小学校や桃谷駅に堤さんの絵が展示された時も拝見しています。その後、小野さんが堤條治さんとの信頼関係を築かれて作品を整理された。数えてみたら400点以上あるそうです。

大阪のまちの拡大と私たちのくらし

会場①　堤さんの絵に植木鉢をつくっている工房がありました。田島のレンズ工場とかも絵として残されていますね。大阪市内の遺跡では、江戸時代の焼き物や骨細工、瓦などの工房跡が発掘されていますが、それらと似たあり方も感じられます。まちの中でないが、それほど離れていない場所。周縁に存在するものの分布を探ると、各時代の様相がより重層的に見えてくるかもしれません。近代までを含めて、まちが広がっていく姿がトレースできるのではないか。いろいろヒントがありそうです。

会場②　私は高島屋のOBですので、堤さんは大先輩。実は、宣伝部門にいたときに、ピンチヒッターで向井潤吉展の担当をしたことがあるのを思い出しました。40年くらい前のことです。

堤條治　楢次郎は、「向井君」とよくお名前を口にしていました。調べていただくと、高島屋の2～3年後輩に向井先生がおられた。

会場③　仁徳天皇の頃は、それまで日本に牛馬なしと書かれていますが、それらは半島から来たものでしょうね。では、猪飼野の「猪」とはなんでしょうか？

足代　野生の猪ではなくて、大陸から渡ってきた家畜化された豚。それを飼っていた種族がこの辺りに居住していたそうです。

未来への遺産をどう生かしていくのか

明尾　私自身、河内の大学にいると、大大阪の時代に都市が周辺に拡大していくという、大阪の中心部から考える都市化のイメージとは、最近は多少異なるところも感じるようになってきました。

私が物心ついた昭和40年代初め頃は、布施の自宅から生駒まで、東側は田んぼばかりで遮るものが少なかった。反対に西側には家が建てこんでいました。いわゆる摂河泉の地域は、今の大阪市中がまだ、まちになっていない時から人が住み暮らす場所。牧歌的に暮らしていたときに、大阪のまち中におけないものが、どんどん外へ出てきた。こうして、地域にとって、住み暮らしていた原風景と人々との紐帯が切られていくことが、大正から昭和の初めに起こってくる。それに対して、堤さんは絵でもって後世に残すことをした。こうした作品群の存在意義。人に見えてこそ、発信ができてこそ、残っていくのが文化だと改めて思うところです。

加藤　今日は、梁石日（ヤンソギル）さんのエッセイを電車の中で読みながらこちらに来ました。その中に、猫間川と砲兵工廠跡を舞台にしたアパッチ族の話も出てきますが、今はほとんど何も残されていません。戦前の大阪の地図を見ると、平野川の旧河道なども見てとれる。しかし、その地にまつわる「記憶」は、地図からでは読み取ることができない。確かに川や道路など空間は地図に記録されるが、そこに出ている大きな工場だけでなく、楢次郎さんが描いた家内工業的な工場も実際はあったはず。こうしたまちの記憶をきちんと記録して、未来に送り返すような基礎的な作業が、これからはやはり大切だと思われます。

司会　楢次郎さんの絵を見た時に、この絵は未来に向かって描かれているということを強く感じました。私たちは、それをきちんと受けとめ、次につなげていければと思います。